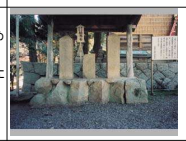
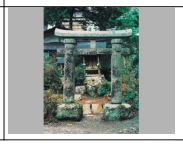
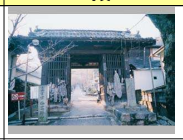
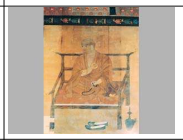
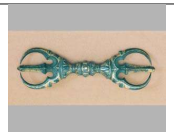
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	2躯	世羅郡世羅町甲山	昭3.8.17	桜材一木造，欅材一木造	像高189cm，170cm	今高野山観音堂の本尊で，一躯（写真右）は桜材で造られ両肩から腕まで共木を用い，胸の瓔珞（ようらく）も同じ木で彫り出す古様な手法である。天衣（てんね）や腕の彫り出しの仕方など一部に地方作風が見られるが，面相姿態がすこぶる端正優麗で，裳は赤，白，緑の草花文で美しく彩色されており，地方作としても中央に比較して遜色のない像である。昭和12年（1937）の修理の際，背面腹部の内刳（うちぐり）から延喜通宝が発見され，像の製作年代を知る重要な手がかりを与えた。 もう一躯（写真左）は欅材で，両肩で両手を矧（はぎ）着けており，彩色像であるが剥落がはなはだしい。簡素で素朴な造りである。 両像とも平安時代中期（10世紀）の作。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像（観音堂安置）	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	世羅郡世羅町字赤屋	昭19.9.5	榧材，一木造	像高147cm	榧（かや）材の足部から蓮肉まで一木彫成（台座周囲は後補）という，平安時代初期（9世紀ころ）によく見られる技法の仏像である。 ずんぐりとした怒り肩の体躯に太い首，著しく奥行の深い頭部に眉目はやや鋭く，あごにくっきりと刳り（くり）の線をほどこし，上唇のつき出た表情など，重厚さと量塊（りょうかい）性に富んだ像である。裳には翻波（ほんぱ）式衣文（えもん）が残り，天衣には旋転（せんてん）文がうづまいて彫り出され，9世紀頃から流行した壇像の趣が濃く，黒ずんでいるがわずかに彩色のあとがうかがえる。頭上の化仏十個は後補であるが，そのうち七個は相当古いものである。貞観彫刻（9世紀ころ）。もと報恩寺観音堂に納められていた。		
国	重要文化財（彫刻）	木造聖観音立像（所在観音堂）	もくぞうしょうかんのんりゅうぞう	1躯	世羅郡世羅町字赤屋	昭19.9.5	檜材，寄木造	像高136cm	菩薩は如来の境地に達する前の段階にあるもので，具体的には，釈迦の出家する前の太子つまり王子の姿をかたどる。観音菩薩はその菩薩の代表的なもので，更にその中でも聖観音は観音の基本形とも言うべきものである。 十一面観音とともに今は廃寺となり，報恩寺仏像収蔵庫に安置されているこの聖観音立像は，檜材の寄木造で，容姿の優麗温雅な平安時代（794～1191）の作品である。		
国	重要文化財（彫刻）	木造獅子頭 下顎裏に正安三年九月彫刻の刻銘がある 附　木造獅子頭　1面	もくぞうししがしら	1面	世羅郡世羅町甲山 （大田庄歴史館寄託）	昭39.1.28	木造，漆塗及彩色	高さ25cm，長さ40cm	鎌倉時代の正安3年（1301）9月の作で，下顎裏に墨書銘がある。大型のもので，おだやかな刀法で作られており，黒漆塗に金や朱の彩色がよく残っている。鎌倉時代の獅子頭の代表的なものである。付（つけたり）の獅子頭は対をなすものであるが，時代は下る。 丹生（たんじょう）神社は今高野山の鎮守。		関連施設：大田庄歴史館（0847-22-4646）
国	重要文化財（彫刻）	木造丹生明神坐像，木造高野明神坐像	もくぞうにうみょうじんざぞう　もくぞうこうやみょうじんざぞう	2軀	世羅郡世羅町甲山	平成30(2018)年10月31日		像高（丹生明神）62.1cm，（高野明神）61.2cm	高野山が備後国大田庄の経営拠点として設けた真言宗寺院，今高野山の鎮守社に伝わる一対の男女神像。平安風をとどめた作風より，大田庄の高野山寄進からさほど隔たらない鎌倉初期の製作とみられる。この時代の神像の優品である。		
県	重要文化財（建造物）	結界石	けっかいせき	3基	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	石造，一基は折損している。花崗岩製。	各高さ88.5cm・幅27.6cm，	今高野山の結界石で，もとは四至（しし）に立てられていたものの一部である。現在は境内の1ヵ所にまとめて保存されている。 その中の1基には「大界外相北方」，他の1基には「大界外相西方建武五年戊寅九月八日」の刻銘がある。「建武五年（南朝年号，1338）」は8月28日に改元され「暦応元年」になっていたが，結界石建立時にその情報が伝わっていなかったことが分かる。 結界石とは，仏道修業等の障害になるものが入ることを許さないため，寺域を標榜した石柱である。		
県	重要文化財（建造物）	廃万福寺塔婆（七層石塔婆）	はいまんぷくじとうば（ななそういしとうば）	1基	世羅郡世羅町堀越	昭29.9.29	花崗岩製　七層	高さ4.19m	この層塔は，廃寺跡の西の尾根線上にあり，南北朝時代の応安3年（南朝年号，1370）藤原行光を大工として建立されたものである。基礎に刻銘をもち，基壇の地下に一字一石の経を納めている。 万福寺跡は三方を小丘に囲まれた小さな谷間にある。中世には栄えた寺院であったと思われるが，現在は一部の礎石や石塔類をわずかに残すのみである。		
県	重要文化財（建造物）	安楽院本堂 附 三門　1棟	あんらくいんほんどう	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭30.1.31	寄棟造。書院造	桁行12.3m，梁間11.0m	この建物は，もと地元有力者の住宅として建造されたものを寄進し寺院としたものと思われ，室町時代後期（15世紀後半～16世紀）の住宅建築を知る上で貴重な遺構である。また，当初の位置に立つ付の山門1棟は，四脚門で安土桃山時代（1573～1602年）の建造。冠木（かぶき）上の蟇股（かえるまた）は時代色をよく表している。 安楽院は今高野山の子院で，もとは今高野山総門から龍華寺へ至る坂の左手にあった。昭和29年（1954），近所からの出火により一部焼損したため，昭和40年（1965）に現在地の大師堂脇へ移築された。		
県	重要文化財（建造物）	粟島神社鳥居	あわしまじんじゃとりい	1基	世羅郡世羅町甲山	昭32.2.5	石造	高さ2.18m，笠の長さ2.20m	粟島神社は安楽院の鎮守で，その境内地に祀られている。柱に「ころび（柱上部が内側に傾くこと）」がなく直立している古式のものである。右石柱裏面に「康暦二年二月十三日」の銘をかすかに読みとることができるが，風化して不明なのは惜しまれる。小さいが古拙な感じのする鳥居である。 ※康暦2年＝1380年		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（建造物）	今高野山総門	いまこうやさんそうもん	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭34.10.30	四足門，切妻造，桟瓦葺		蟇股（かえるまた），頭貫（かしらぬき）上の絵様肘木（えようひじき），懸魚（けぎょ）等から判断して，室町時代末期（16世紀後半）の建立と考えられる四脚門であり，北面して参道入口に建っている。今高野山一山の総出入門であったといわれ，門から龍華寺にいたる道の両側にはかつての塔頭の跡が並んでいる。 今高野山は，大田庄が紀州高野山の荘園となった文治2年（1186）以降に創建されたと考えられている。大田庄は高野山の大きな財源であったため，その勢力の拡充を目指し，大伽藍を建て，高野山の守護神である丹生，高野両明神をも勧請して新しい高野山という意味で今高野山と命名したという。		
県	重要文化財（建造物）	万年寺僧侶墓碑 無縫塔（銘扶岩） 同（銘長安） 同（無銘） 墓碑（銘永禄四年鳳麾隣禅師） 同（銘平翁均禅師） 宝篋印塔（銘天文十六寿岳楽栄） 五輪塔（無銘）	まんねんじそうりょぼひ	7基	世羅郡世羅町川尻	昭34.10.30		無縫塔（扶岩）高さ1.03m。 無縫塔（長安）高さ0.7m。 無縫塔（無銘）高さ1.39m。 墓碑（永禄四年）高さ1.06m 墓碑（平翁均禅師）高さ1.0m。 宝篋印塔　高さ1.18m。 五輪塔　高さ0.94m。	万年寺は鎌倉から室町時代（12～16世紀）にかけて栄えた臨済宗仏通寺の寺院で，廃寺となっていたが，三川ダムの建設と共に水没し，残存する石塔群はダムの中にある小島に移され保存されている。移転した石塔類は多いが，その中の七基は中世禅宗墓制を研究する上で貴重な資料である。		
県	重要文化財（建造物）	稲生神社本殿	いなりじんじゃほんでん	1棟	世羅郡世羅町上津田	平11.4.19	正面三間，入母屋造平入，銅板葺		江戸時代の正徳5年(1715)の建立である。方三間（方5.44m）の前室付平面で前一間は吹き放しになっている。この平面形式は本県においては17～18世紀にかけて多数造営され，当本殿はその最盛期の建立になる。 龍や獅子，鳳凰，虎など主要部に彫刻装飾がみられ，地方の建築技術者の建築装飾に対する理解や認識の伝播を知る上で好資材である。彫態が良好で，細部に地方色が濃厚にみられ，近世の地域大工層の建築技術の摂取消化そして創意工夫による受容の様態を知る上で貴重な遺構である。 稲生神社は大永2年（1522)に下津田村大須佐山（世羅西町）に京都伏見稲荷大社を勧請し，永禄12年（1569）8月に現在地に遷座して社殿を造営したと伝えられている。この時，夜中の遷宮に従った氏子によるたいまつの行事が県無形民俗文化財指定の「神殿入り」である。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色弘法大師画像	けんぽんちゃくしょくこうぼうだいしがぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	絹本著色，屏風仕立て，	縦232cm，横147cm	今高野山御影堂の本尊で，いす式の座に正座する大師像を描いている。高野山，善通寺のそれとともに三大師像と称される名品で，それらと同様に秘仏として伝存した大師像である。 わが国最古の大師像は京都醍醐寺及び大阪金剛寺の平安時代（794～1191年）作のものであるが，本品は鎌倉時代初期（13世紀前半）の数少ない作品の一つで貴重である。		関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
県	重要文化財（絵画）	絹本著色十六善神像	けんぽんちゃくしょくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭53.10.4	絹本著色，軸装	縦101.4cm，横49cm	十六善神とは，大般若経を守護する護法善神で，釈迦如来らと共に描かれた画幅は，大般若会の本尊としていくつか遺存している。 この絵も他によく見られる構図で描かれており，法衣を通肩（つうけん）にかけ施無畏（せむい）印を結び獅子座に坐った中尊釈迦如来を中心に，その頭部に円光をあらわしている。釈迦の下方左右には，文殊菩薩，普賢菩薩等四菩薩と毘盧博叉善神（びるはしゃぜんしん）等の十六善神を配し，最下方に玄奘（げんじょう）三蔵法師の求法の姿と鬼像を描いている。釈迦の上方には，暈繝（どんらん）彩色と見られる天蓋を描き懸げている。剥落の部分はあるが補筆はなく，よく当初の状態をとどめた室町時代末期（16世紀）の作である。 龍華寺は今高野山ともいい，大田庄の中核寺院であった。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
県	重要文化財（彫刻）	木造大日如来座像	もくぞうだいにちにょらいざぞう	1躯	世羅郡世羅町	昭28.6.23	寄木造，玉眼入り	像高66cm，膝張57cm，台座高さ88cm，光背高さ103cm	玉眼入り，漆箔のこの仏像は金剛界の大日如来で，もとは今高野山境内の現在塔の岡と呼ばれている丘陵に立っていた。多宝塔の本尊であったと伝えられる。胎内の頭の部分に「元亨三年（1323）八月十五日源近宗」という墨書銘があり，造立年が明確で，仏体だけでなく光背，台座ともに当初のものが完存していることは極めて稀であり，このような例は，鎌倉時代（1192～1332）以前の仏像には非常に少ない。		関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫 （0847-22-0840）
県	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	世羅郡世羅町西神崎	昭28.6.23	一木造	像高100cm	観世音は大悲大慈の菩薩で，その功徳により，千手，如意輪，馬頭などの観音に変化して人々の崇拝を受けたが，十一面観音もそのような変化観音の最初の菩薩で，十一種の威力を一身にあらわしたものといえる。 この観音は化仏を欠失しているが，口髭や唇の紅などに当初の彩色を残した平安時代（794～1191）の優れた作品である。小像ではあるが，木目を巧みに利用したこの菩薩は，かって今高野山ゆかりの大寺の遺跡かと思われる大御堂に安置され，地元の人々によって大切に保存されている。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来座像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29	寄木造	像高64cm，膝張54cm	『芸藩通志』によると，江戸時代後期（18～19世紀前半）には善法寺は廃寺になっており，相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で，かつては真言宗寺院であったと伝えられている。 平安時代（794～1191）の作で，衣の襟が異常に高く，出雲地方によく見られる地方色がある。陰陽の文化交流を考える資料である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来立像残欠	もくぞうやくしにょらいざぞうおよびざんけつ	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29		現在の高さ70cm	『芸藩通志』によると，江戸時代後期（18～19世紀前半）には善法寺は廃寺になっており，相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で，かつては真言宗寺院であったと伝えられている。 平安時代（794～1191）の作で，腰から下は切り落とされて現存しない。この仏像は衣の襟が異常に高く，出雲地方によく見られる地方色がある。陰陽の文化交流を考える資料である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（彫刻）	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	世羅郡世羅町伊尾	昭30.9.28	一木造，彩色	像高54cm	狛犬は，宮中や神社におかれた守護獣の像で，普通の獅子と一角をもつ獅子の姿に作られ，それぞれ阿吽（あうん）をあらわすのが一般的である。 本像は，かつて大田庄桑原方庄司が治めていた地域の，井原八幡神社の陸神門にある。彩色の大部分は剥落し，美しい木目が表れているこの一対は，室町時代（1333～1572）の作品と思われる。		関連施設：大田庄歴史館 （0847-22-4646）
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	世羅郡世羅町田打	昭53.10.4	寄木造，漆箔	像高68cm，膝張66.5cm，光背の高さ139cm，幅102.5cm，台座の高さ47cm	頭部螺髪（らほつ）を大型に造ったこの仏像は，衣文に翻波（ほんぱ）式の彫技をうかがえる部分を所々に残した，本格派仏師の作と思われる。像全体は表面に漆を塗り，その上に金箔をおいている。像体を倒して内部を見ると寄木の状態及び鉞（かすがい）の使用がよく分かる。右手を肩にはめこむ技法を用いていることは，寄木造の一手法を知るうえで重要である。また，胎内の背の部分に承元4年（1210）の造立銘，膝部の裏に天文2年（1533）の修理銘があり，この仏像の造立年やその趣旨を知ることができ，貴重な資料である。		
県	重要文化財（工芸品）	三鈷	さんこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	金銅製	長さ20cm	これは独鈷（どっこ）とともに密教の修法に用いられる法具の一つで，仏教では心中の煩悩をくだき仏性の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹高野山龍華寺に伝わるもので，独鈷は断面方形，鬼目（おにめ）はよく時代の特色を示す鎌倉時代（1192～1332）の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫 （0847-22-0840）
県	重要文化財（工芸品）	独鈷	どっこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.8.11	金銅製	長さ21cm	三鈷（さんこ）とともに密教の修法に用いられる法具の一つで，仏教では心中の煩悩をくだき仏精の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹今高野山龍華寺に伝わるもので，鈷部は断面方形，鬼目（おにめ）はよく時代の特色を示す鎌倉時代（1192～1332）の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫 （0847-22-0840）
県	重要文化財（工芸品）	戸張 永祿十年丁卯五月吉日と墨書がある	とばり	1幅	世羅郡世羅町東上原	昭32.2.5		縦174cm，幅183cm（幅61cmの布3枚をつづる）	舶来の緞子（どんす）と思われる布の上部をつづったもので，これには梵字，観音経の一節のほか，永禄10年（1567）に吉光弥三郎なる者が奉納した旨が墨書してある。 「敬白，奉掛御八幡戸張之事」 「具一切功徳，慈眼視衆生，福聚海無量，是故応頂礼」 「右為，護持信心之大施主立願成就，皆令満足，息災延命，如意吉祥祈所而已， 永禄十年丁卯五月吉日，吉光弥三郎壬，寅歳敬白」		
県	重要文化財（工芸品）	太鼓	たいこ	1張	世羅郡世羅町東上原	昭41.4.28	胴張なし	径55cm，胴の幅56cm。	胴内に墨書銘があるが判別しにくい。分かったものでは，文明18年（1486）と天正10年（1582）の銘がある。太鼓の作り方が珍らしく，胴張がなく自然木をくったままで，両側の皮は，細い皮ひもで引っぱってしめてある。胴の内側には，三方から鉄のわつなぎがあり，何らかの音響効果をねらったものと考えられる。		関連施設：大田庄歴史館 （0847-22-4646）
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書大般若経	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	393帖	世羅郡世羅町田打	昭50.9.19	紙本墨書，折本	縦27.6cm，横11.5cm	南北朝時代の永和3～5年（1377～1379）に備後国三原金剛院開山源恵が願主となり，同寺のために，三原，沼田荘付近の寺院で多数の僧が協力して書写したものであることが奥書によって知られる。書写の場所として三原大智坊，蓋沼寺（ひきぬでら），楽音寺，香根島長善寺等，当時の真言宗寺院の分布状態が知られる。 その後，文明2年（1470）に伊予国越智郡朝倉郷（愛媛県越智郡朝倉村）の神社に奉納されているが，これは小早川氏の所領関係によると考えられる。更に後には再び海を渡り豊田郡舟木村（本郷町）の永福寺の所有になったようで，経典の裏に永正末期（1520年ごろ）から永祿年間（1558～1570）にかけての永福寺等の記事がある。更に三転して永寿寺に入ったのは江戸時代に入ってからである。		
県	重要文化財（考古資料）	丸小山経塚出土品 経筒（蓋付）　1口 厨子入り木造十一面観音立像　1躯	まるこやまきょうづかしゅつどひん	2点	世羅郡世羅町	平22.4.19			本出土品は，経筒と厨子に入った木造十一面観音立像からなる。経筒は16世紀前半を中心にみられる，定型化した六十六部（ろくじゅうろくぶ）回国（かいこく）納経（のうきょう）経筒の特徴を備えている。 回国経筒に仏像を伴う例は，西日本では少ない。県内では，紀年銘（きねんめい）があって完全な形で残り，出土状況まで確認できる唯一の回国経筒である。 本出土品は，16世紀前半の世羅郡のみでなく，戦国時代の安芸や備後地域の社会を解明するための貴重な考古資料である。		
県	史跡	康徳寺古墳	こうとくじこふん		世羅郡世羅町寺町小字箕口	昭15.2.23	円墳（横穴式石室）	直径15m，高さ5m 石室／奥行き9.5m（玄室7.5m，羨道2m），幅2.45m，高さ2.4m	世羅盆地の北西寄りの丘陵斜面に位置し，臨済宗康徳寺の門前にあるところから，この古墳の名称がつけられた。直径約17m，高さ約5mの円墳で，内部主体は横穴式石室である。石室は全長9.5m，高さ2.4mで，玄室は長さ5.9m，中央幅2.5m，高さ（奥壁部）3.2m，羨道は長さ2.4m，幅1.8mで，この地域では最大規模である。石室の構造などから6世紀末頃のものと推定される。 平成7・8年（1995・1996）に環境整備事業が行われ，須恵器・土師器・耳環のほか中世の土師質土器・瓦器・土鍋などや，仏具や泥塔，墨書樒などが出土した。 この古墳の東側に接して，白鳳時代（7世紀後半ごろ）の古瓦を出土する寺院跡があり，康徳寺廃寺跡と称される。この古墳の被葬者につらなる豪族によって，寺院の建立された可能性も強い。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	万福寺跡	まんぷくじあと		世羅郡世羅町堀越字日南	昭15.2.23	中世の寺院跡		世羅町京丸地区の天神社谷の奥まった場所に位置し，小坂山と号す中世の寺院跡と言われる。盆地との比高約50m，三方を丘陵に囲まれれ，南に開けた傾斜地で，寺院跡の位置は明瞭でないが，幅50～60m，奥行約100mの広さがある。現在上手中央の奥まった所に宝篋印塔（ほうきょういんとう）と五輪塔残片があり，南西小祀（しょうし）の付近にも五輪塔，宝篋印塔多数がある。また，この寺跡を囲む東側の丘陵尾根上には，正平12年（1357）の紀年銘をもつ宝篋印塔，西の丘には応安3年（1370）の紀年銘をもつ石造七層塔婆（県重文）などがある。		
県	史跡	今高野山	いまこうやさん		世羅郡世羅町甲山	昭27.2.22 平11.4.19（追加指定）			甲山を中心とする世羅郡の東半一帯は12世紀末以来，高野山領大田庄であった。この庄園は地方豪族橘氏から平家に寄進され，平氏は後白河院を庄園領主とあおぎ平重衡が預所となっていた。平氏が滅亡すると文治2年（1186），院から高野山の大塔維持のため金剛峯寺に寄進され，高野山の経済をになう重要な庄園であった。今高野山龍華（りゅうげ）寺は大田庄経営の中心であり，弘法大師の御影堂が設けられ高野・丹生（たんじょう）明神も勧請され，十二院が一山をなしていた。今日，福智院，安楽院の子院が残り，木造十一面観音立像（重要文化財）をはじめ，当時以来の遺品が少なくない。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
県	史跡	神田第二号古墳	じんでんだいにごうこふん		世羅郡世羅町堀越字神田	昭61.11.25	「軸受けをもつ石扉」をもつ横穴式石室	石室現存長3.4m，玄室長さ1.52m，奥壁部幅3m	神田第2号古墳は，広島県のほぼ中央の世羅台地に源流をもつ芦田川を眼下にみる天神山南麓の急傾斜地（標高370m，水田面からの比高10m）に位置する終末期（7世紀）の横穴式石室墳である。この古墳の東約10m，高さにして約2m高位置にある横穴式石室墳である第1号古墳とあわせ2基で神田古墳群を形成する。第2号古墳は，古くからの開墾により墳丘東半や石室東側の石材が抜き取られており，墳丘の詳細は明らかにできないが，残存する西，南側には主体部と並・直行する落ち込みがみられ，これを墳端とするなら一辺約9mの方形墳で，高さは石室床面から約3mであった可能性が強い。この古墳は「軸式片開き扉石」をつけた畿内型の切石を用いた終末期古墳ということが最大の特徴である。		
県	史跡	カナクロ谷製鉄遺跡	かなくろだにせいてついせき		世羅郡世羅町黒渕字東山	昭62.12.21			遺跡は，農園北隅の丘陵南斜面を12×9mの範囲に平坦にした場所にあり，斜面の下手は鉄滓（てっさい）・炉壁などの捨場となっている。遺構としては2基の製鉄炉（地下施設）が残っていた。第1号炉は，平坦面のほぼ中央に位置し，第2号炉は平坦面中央の北寄りに位置している。第1号炉・2号炉ともに，炉底下に防湿の施設がみられる。出土の鉄滓類は，二酸化チタンの含有から，3つのグループに分けられ，製鉄の原料としては砂鉄と鉄鉱石の混用されたことが推察される。鉄鉱石はマンガンを多く含む磁鉄鉱を中心とする。マンガン鋼に近い鉄が生産されたのであろうか。 この遺跡の年代は，出土の須恵器片から6世紀末から7世紀初めごろの時期と推定される。本遺跡は，県内でもこの時期のものは例が少なく，中国地方の砂鉄製錬の源流に位置づけられる重要な遺跡である。		
県	天然記念物	赤屋八幡神社の社叢	あかやはちまんじんじゃのしゃそう		世羅郡世羅町赤屋字根廣田	昭26.4.6			社叢内の樹はスギが支配的であるが，巨樹は比較的少ない。しかし，シラカシ・カシワ・ソヨゴ・クリ・シデ類などの混生が多く，この地方本来の林相を示している。カシワの中には胸高幹囲3.05mに達するもの，またシデは3.05mに達するものがあり，いずれもカシワ及びシデとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	男鹿山スズラン南限地	おじかやますずらんなんげんち		世羅郡世羅町青近字男鹿山	昭26.4.6			スズランは我が国の中部以北の山野では珍しくないが，近畿以南の地ではごく稀である。本群落は，玄武岩からなる男鹿山（標高634m）の山頂に近い北側斜面（620～630m）にあり，その範囲は狭い。すでに国指定となっている奈良県北部で発見された自生地とほぼ同緯度に位置し，中国地方にあるものとして，その学術上の価値は高く，スズランの分布の南限地として注目されている。		
県	天然記念物	今高野山のカラマツ	いまこうやさんのからまつ		世羅郡世羅町甲山	昭30.1.31			カラマツは，我が国特産の落葉針葉高木で，宮城県，石川県及び静岡県を限界とする本州の中部地方のみに自生している。しかし，これまでに植林が成功しているのは中部以北の寒冷地方であり，中部以南の地で本樹のような巨木が見られることはまれである。本樹はカラマツとしては県内有数の巨樹であり，カラマツの独立木の代表的な樹形を示している。なお，文化年間（1804～1814）編の「西備名区」の中にも，今高野山の落葉松として本樹が記録されている。		
県	天然記念物	宇津戸領家八幡神社の社叢	うづとりょうけはちまんじんじゃのしゃそう		世羅郡世羅町宇津戸字宮沖，同字松ケ鼻	昭46.4.30			本社叢は海抜320mのところにあるウラジロガシ，ツクバネガシを主とする樹林で，大径木のほか，多数の小径木が生育して常緑カシ林の自己維持性が認められる。県内の社叢における常緑カシの組合せには，シラカシ型，シラカシ－ツクバネガシ型，シラカシ－アラカシ型，ウラジロガシ型，ツクバネガシ型等があるが，本社叢はウラジロガシ－ツクバネガシ型ともいうべきもので，常緑カシ類の植物分布地理学的見地からも，植物社会学的見地からも重要なものである。		
県	天然記念物	津田明神の備北層群と粗面岩	つだみょうじんのびほくそうぐんとそめんいわ		世羅郡世羅町下津田	平10.9.21			世羅郡西町北部にそびえる標高約593mの津田明神の山体は，備北群層の堆積（1400万～1600万年前）から，それに引き続いた粗面岩の活動，さらに玄武岩の活動までの地震記録を最も完全に近い形で保持している。 備北群相当層及び粗面岩が形成されたのは，新生代新第三世紀中新世（2300万年前～500万年前）の期である。その当時，アジア大陸東縁部では下部地殻～マントルに達するようなリフト（大型裂帯）が形成された。その東側は大規模な火山活動を伴いながら南に移動することにより，日本列島が誕生し，アジア大陸との間に日本海が形成された。 本露頭は，このような日本列島誕生時の激しい地殻変動，すなわち海域での地層形成→陸化→粗面岩の噴出という，海陸で起こった一連の地質現象を明瞭に記録した極めて貴重なものである。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	神殿入り―神殿入り，神楽，夜の御幸―	こうどなり―こうどなり・かぐら・よるのみゆき―		世羅郡世羅町	昭48.12.18			これは世羅西町上津田の稲生神社の神事で，10月9日の夕刻から翌10日の早朝にかけて行われる祭典である。氏子である旧9ヶ村の人々が豊作を感謝して神霊の移御された大灯明を神社へ奉還し，神社では松明を点じ神楽を奉納し，御輿を担いで神社と御旅所を往復する。規模も大きく歴史的にも縁起は古く，同種の祭典で古形を伝えるのは，この地の祭のみである。 「神殿入り」はよごろ以下六つの行事から成っているが，最も圧巻は大灯明を神社に奉還する行事である。大灯明は多くの灯明を一本の竿につけたもので，灯明の形によって，七灯・舟後光・五重塔・奉字その他がある。 これらが漆黒の闇の中に浮かんで移動してくる様は奇観というべく，火の祭典の名にふさわしい。		
国	登録有形文化財（建造物）	眼鏡橋	めがねばし	1基	世羅郡世羅町小世良	平22.4.28	石造アーチ橋，橋長6.6m，幅員12m，擁壁付		芦田川水系乙川に架かり，尾道と三次を結ぶ旧幹線道路の橋梁。 橋長6.6m，幅12mの花崗岩を用いた半円の石造単アーチ橋で，左右に石造擁壁を附属する。 坑門は布積で精緻に築く。 県内では数少ない石造アーチ橋の一つで，明治の道路近代化の歴史を物語る。		
国	登録有形文化財（建造物）	菩光寺観音堂 （旧大田尋常高等小学校奉安殿）	ふこうじかんのんどう（きゅうおおたじんじょうこうとうしょうがっこうほうあんでん	1棟	世羅郡世羅町大田	平23.1.26	石造平屋建，建築面積3.3㎡，基壇付		境内南寄りの山門西側に築いた亀甲石積の基壇上に建ち，間口，奥行とも1.8m，石造である。切石布積の躯体前面にたてたドリス式風の円柱で庇を受ける。屋根は三段構成で，下段は下端を蛇腹状につくり，上段は切妻形で，妻面に菱状の紋様を彫る。 昭和10年建設，昭和21年移築。		